
腹黒生徒会長様。

yukaringo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腹黒生徒会長様。

【Nコード】

N8129D

【作者名】

yukaringo

【あらすじ】

ちよつとおバカな中学三年生、柿野かなで。その日、かなではテストで赤点をとってしまい、テストを燃やしているところを見つけて！？リボーンの話題がきたま入ってきます。＊続編希望がありました！＊続編が読みたい方は、コメント欄にてお伝えください！

第一話 見つかったぜ(泣)

私は紙切れを前に、ライターとやかんを持って屋上に座り込んでいた。

紙切れ・・・イコール、テスト。

こんな紙切れ一枚で、私の人生に支障はない！そう！これはあるだけ無駄なのだよ！

シュボツ、という音を立てて、テストに火がついた。

フッフ、これで証拠隠滅が完了する

そして、私が何もなかった顔で家に帰れば、回避できなさそうだった雷を回避することが可能になる！

テスト用紙が燃え尽きた後、私は燃え殻にやかんの中の水をかけた。

ウッフ！さーて、家に帰ろう！

「何してるの」

「あ s d j k d j ヴイウエ h h s d h f s j v : あ k v @ j v w
ば q w ふ お s w h ! ? 」

しまった！人が見ていたのか！しかも、ノリにノって変な声を出してしまった！

どうする・・・今から目撃者の頭を殴って記憶から抹消してやるか・・・？

そんなことを考えているうちに、目撃者は私の前に姿を現した。

「何してるの」

目撃者は、男子だった。

一年生だろうか。まだ、顔に幼さが残っている。

「君……三年の、柿野かなでだよね」

こいつ……同学年か？先輩を呼び捨てにするっていうのはおかしいだろう。

あ……高等部かな！？高等部様に目をつけられた！？

説明遅れました。私、柿野かなで（中学三年）が通う学校は、小中、高とつながっているのですよ。

……で、その高等部の方かただろうか！？

でも、小学四年生くらいの身長。……生意気な一年生だろうか。

「聞ってる？ここつて、火気厳禁なんだけど」

うーん……逃げよ。

私の幸せな日常を壊されてたまるか！

私はダッシュで屋上を出ようとした。

あ！抜かされた！チクシヨウ！

自分の足の遅さを呪いたくなった一瞬だった。

しかし！人間やるるときややるんだよ！

私は追いかけてきたそいつを抜かし、屋上の階段を下りようとした。

ズドガガガガ！

階段から落ちた。

おかげでそいつに追いつかれた。

「チクシヨウ！階段め！私の幸せを返せえ！」

私が叫んでいると、そいつはクスツと笑った。

「君、面白いね」

「ぶっちゃけもうどーでもいいツスよ。とりあえず、私の幸せを返してくれるかな！？」

私は、せめてもの抵抗にと不貞腐れてうじうじした。

「……僕の名前は、綾崎雛。高等部の一年で、生徒会長だよ。

いつでも生徒会室に居るから、暇だったら来てみなよ。」

せ……

「生徒会長さまああ!？」

「そうだけど」

「いえ、あの、申し訳御座いませ……!」

私は即座に土下座した。

「大丈夫だよ、ライターのことは黙っててあげる」

「せ……生徒会長様……」

私が顔を上げると、そこには分かりやすく「弱点ノート」とかい
た物をもつ、生徒会長様がいらっしやりました。

「黙っててあげるから、ね?絶対来てね、待ってるから」

私は無言でうなずいた……が、心の中では、

「忘れる気、この人これっぽっちもねえよ!」

という思いが駆け巡っていた。

今日の日記

いやー、とんでもない人に喧嘩売っちゃったよ。
ウフフ、どうしようね!

ちなみに、テストの点数は25点、赤点でした

第二話 勧誘されちゃった

はー・・・疲れた。

違う違う、疲れたんじゃないくて・・・。

「何だあの生徒会長はあああ！！！」

一瞬感謝しかけた私の心を裏切りやがって！

・・・つか・・・「絶対来てね」とか言っていなかったか？あいつ。

あ、説明遅れました。今日は5月10日、つまり私が綾崎雛とであつた日の翌日です。

・・・生徒会室行かないと・・・バラされるよ、ね。

私は教室から出て、高等部の生徒会室へ向かった。

っていうか・・・生徒会室ってなんで学校の最上階にあるんだろうか（もちろん屋上の下）。無駄に遠つ。

疲労している私をもっと疲労させるかのような長い階段を上り、やっと生徒会室の前に着いた。

コンコン

「入って」

「あ、失礼します」

私は生徒会室の中に入った。

しかし、その部屋の中は私が予想していたよりもひろく、とても物が多かった。

しかも、

「何で綾崎先輩一人なんですか？」

「・・・だって僕一人で十分だし。会計とかいても、邪魔なだけ

だよ」

あんたはそこまで有能なのか。

「・・・ていうか、よくきたね。そろそろ来ないとバラすつもりでいたんだよね。」

コワッ。この人コワッ！

「それにしても、広い部屋ですね」

「そうだよな。おかげで仕事がしやすい」

「・・・何でも一人でこなしてるんですか？」

「当たり前でしょ。それくらいはできないと」

そのとき、私自身も思っていない言葉が私の口から出た。

「寂しくないんですか？」

「・・・は？」

「・・・だから、寂しくないんですか？」

綾崎先輩は口元を妙に歪ませて言った。

「僕が寂しいと思う？中学一年の頃からこの仕事やってるけど、一度も思ったことはないよ。」

「そう・・・ですか」

はは・・・何を言ってるんだ、私は。この人に常識を求めたってダメだと、昨日確信したじゃないか。

「そんなに僕のことを寂しい人間だと思うなら、生徒会入りなよ」

「・・・へ？」

「だから、入りなよ。生徒会。今なら副会長にしてあげる」

「え？あの、その」

「僕の言うことが聞けないの？」

綾崎先輩は、私の前で弱点ノートをちらつかせている。

チクシヨウ！わかったよ！

「わかりましたよっ……」

やっぱり、何かの間違いだった。この人も、たまには寂しいとか
思うんだなあ……って言うのは。

こいつはやっぱり、冷酷非道だよ！まったく、お前の血は何色だ！

「……赤だけど」

「ひい！人の心を読まないでくださいよ！」

「……思いつき口にだしてたけど」

うわああん！私のバカ……！

「あ、そうそう。机の上の書類、片付けといてね」

そういつて綾崎先輩は、机の上の山積みになった書類を指差した。

コレを私にやれってか？

うわああん！副会長なんかやるんじゃないかった！！

今日の日記

何かノリで、副会長になってしまったよ。

あー……やるんじゃないかったなあ……。

余計疲労感が増しました。

いや、やだよ。

私まだ十五年しか生きてないし。

神様！私はもう　に逝かなきゃだめなんスカ！？

この年で天に召されるのはちよつと・・・。

だつてほら・・・誰かも言つてたじゃん。

「若いうちはゝやりたいことゝなんでもでゝきるのゝさゝ」って！

私まだ、やりたいことやってないんですけど！

死にたくない！！いや、むしろ死んでも死にきれねえ！

家庭教師ヒットマンREBONの漫画全巻読むまで死にきれねえ！！

「死んでたまるか！むしろ、打倒　生徒会長！」

私が天井に向かって人差し指を突き出すと、真優は拍手をした。

そこに、ザワとかいうざわめきが起こった。

ふと入り口を見ると、

せ・・・・・・

「生徒会長様ああああ！！！？？」

「君はいつも面白いことを言つてくれるね」

「すみませつ・・・・・・！」

「辞世の句は詠めた？じゃ、逝こうか」

行くの漢字が違いますよ！

それを言う前に、私は生徒会長様にひきずられて生徒会室に着いた。

「すすす、すみませすみませ・・・・」

「打倒生徒会長？いい度胸だね、君」
「すみませつ……」

「いいから。」

「……へ？」

思いもよらない言葉を聞いた。

「いいから、さつさとその書類片付けてくれる？」

「え？え？私、天に召される必要はなくなったの？」

「当たり前でしょ。君と喧嘩したって手ごたえ無いからね」
よ……

「よっしやあああああああああ……！！！！！！」

「うるさいな」

「ありがとう！生徒会長様ありがとう！君は思った以上にやさしい人だ！」

「君が思っていた僕ってどれくらい冷徹なわけ」

「過去のことはきにしない、きにしない！終わりよければすべてよし！」

「まだ始まったばかりだよ」

「一部始終よければすべてよし！」

「ぐだぐだ言っでないでさつさと書類片付けてくれる？」

「はい！喜んで！」

今日の日記 五月十一日。

なんか、生徒会長様は優しかったり怖かったり。
しかし！本当だね誰かさん！

「若いうちはぐやりたいことぐなんでもぐぐきるのぐやぐ
て！」

本当だったんだね！

今まで信じなくてごめんね！

第四話 サディスト生徒会長様。

「ねえ。いつまで寝てるの？」

誰かの声が聞こえる。

「ねえ」

人の眠りの妨げをするんじゃないよ。

「起きないと、永遠に眠らせるよ」

「はい、おはようございまーす」

私は机から離れた。

あ、ヨダレついてる。

「汚い」

私を露骨に脅してきた生徒会長様こと綾崎雛先輩は、布を指差した。あの、取ってくれたつていいんじゃないですか？

「グダグダ言っていないでさっさとふいてくれる？」

「はい、すみません」

私は布を手に取り、ふきはじめた。

「それにさ、君。昨日やるように言ってた書類、全然終わってないんだけど」

「すみません、ついですね」

「つい、僕へのイタズラに熱が入ったとでも？」

生徒会長様は、「あや LOVE」と書いた会長専用の書類をひらひらさせる。

「すみません」

「すみませんで済むなら警察はいらないよね」

「いや、ほんとすんません。私まだやりたいことやってないんで、
今天に召されるのはちよつと……。それに、家庭教師ヒットマン
REBOR ! もまだ全巻読んでないし……。読まないと死にきれ
ないって言うかなんていうか」

私が必死に理屈を並べていると、生徒会長様は（私が）見たこと
もないような顔で盛大にふきだされました。

「……。つふ……。やつぱり君、面白いね。じゃ、コレ追加ね」

綾崎先輩はドサドサと書類を積み重ねた。

「ええ!! そーやって!?!? つか面白いんだつたら書類減らせや
ゴルァ!」

「いいの? 僕にそんな口きいて。」

綾崎せんぱい。いや、生徒会長様は黒い笑みを浮かべつつ、弱
点ノートをちらつかせた。

私は無言で書類を片付け始めた。

……が!

私はとあることに気づいた。

……。第四話目で早くも言っちゃうけど……。

このサディスト生徒会長と出会って……。私の……。

私の幸せ壊れてんじゃない!!!!!!

あのテストを燃やせば終わりだった、はずなのに……。
このサディスト生徒会長と出会って、副会長になって……。
帰宅部の私は家に帰ればすぐにパソコンができたのに!!
今はどうだと思う!?!? この大量な書類のせいで（あとサディスト

生徒会長のせい)、私は・・・私は・・・

むっきゅんとバリ様のドーム小説が読めねえんだよ!!!!!!

手元のシャーペンがメシツと音を立てた。

そして気づいたときには、私は・・・・・・・・・・

「うああああああ!!私の幸せ返せゴラァ!!!!!!!!!!」

生徒会長様に襲い掛かっておりました。

ドオオオオオーーン

生徒会長様と盛大にぶつかったとき、

「あ、死んだ。」

と思った。

そう思ったら、いきなり生徒会室の扉が開いた。

扉を開けたのは、真優だった。

そのときの私と生徒会長様は・・・・・・・・。

私が生徒会長様を押し倒したかたちになっておりました。

第五話 頑張れ曾山君

ぶつすううううつ。

そんな効果音を使っても、やりすぎでもないような顔をした後輩がソファに腰掛けている。

かなり不機嫌そうだ。

「君。そんなブツサイクな顔をしている暇があったら、さっさとその書類片付けてくれる？」

僕の言葉で、彼女はより不機嫌になった。

「先輩のせいで友達が休んじやったんですが」

「・・・は？それは君のせいの間違いじゃないの？」

「百パー先輩のせいですよ」

「何？僕が事の発端ってわけ」

「そうです」

「そつちから僕に襲い掛かってきたんでしょ」

「う・・・そうですけど・・・」

僕に口喧嘩で勝てつこないのに、喧嘩を売ってくるところがおもしろい。

「そうですけど、何？」

「・・・あーもうわかりましたよ。悪いのは私です、ごめんなさい！」

「あ、そ。じゃあ、こつちの書類も片付けてね」

僕は、山になっている書類の上に、新たな書類を追加した。何を思ったのか、かなでは不意に立ち上がって叫んだ。

「何スかこの状況！まるでサディストな風紀委員長とドーム小説のヒロインみたいになってるんじゃないですか！」

「・・・は？何言ってるの、君」

「何も何でも、この状況を変えてほしいんですが！」

僕は自分でもわかるほど不敵な笑みを浮かべた。

「じゃあ、僕がライターのことを校長に言えばいいんだね」

「何でそうなるんですか！」

「じゃあどうするの」

「あーもうわかりましたよ！私の負けですごめんなさい！」

かなでは一方的に会話を断ち切って、再び書類にペンを走らせた。

「・・・今日の僕へのイタズラを考えて、書類が進まなかったってわけ？」

僕は、「沢尻工 カ LOVE」とかかれた会長専用の書類をひらひらさせた。この前は、あやだったね。

「えーと・・・その」

「・・・謝らなくていいから、お茶買ってきて、お茶。僕は一番値段が高い奴ね。」

「わかりました。・・・えつと・・・私のは？」

僕はフツと鼻を鳴らして、

「君が一番安いお茶でいいでしょ」

と言った。

かなでは顔を引きつらせて、生徒会室を出ていった。

僕はそつと、かなでの仕上げた書類を見た。

「・・・ん？」

端っこに、「むつきゅん、バリーヌ、LOVE」と書いてある。

・・・こんなところで著作権に気を使う話題は持ち出すなよ。

僕は消しゴムでその文字を消し去った。

「つたく。何だよあの生徒会長は！」

私はブツブツ言いながら購買に行った。

いや、だって本当にむかつくんだもん。

何だよアイツ、人のことを「君自体安いからお茶も安くていいで

「みたいなこと言いやがって（そこまで言っていない）！」

購買の飲み物コーナーに行こうとした私は、ふと足を止めた。

私が足を止めた場所は、お菓子コーナー。

可愛くて、おいしそうなお菓子が並んでいるので、思わず足を止めてしまった。

アイツの金だし、お釣でも買おう。

私は飲み物コーナーへ向かい、一番安いお茶と一番高いお茶を買おうとしたけど、やっぱりやめて両方高いやつにした。

そして再びお菓子コーナーへ向かった。

たくさんあるので、たくさん買ってしまった。殺される可能性大だね！

私が「巷では変態と噂のナツポーさん」のキャラソングを鼻歌で歌っていると、仲の良いクラスメイトの男子が話しかけてきた。

「こんちゃー曾山君」

彼の名前は、曾山君という。

「ねえ、柿野」

何？

「お前さ、あの綾崎先輩と一緒に生徒会してるらしいけど・・・付き合ったりしてるの?」

「ふあ？」

間抜けな声が出てしまった。

「……付き合っていないよ」

「へえ……そう。よかった」

え？

[illegible]

「あのう……良かった、って？」

「私、むっきゅんとバリ様しか好きじゃないって言った」

・・・かわいそうだね、その男子。

今日の日記。 五月十三日。

なんか告白されました。

それに、なんか会長様に殴られました。

ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおお

殴りたいのはこっちだ！

第六話 準備満タンだね、会長（泣）

今日も晴れている。

そんな現実逃避をしたくなるような効果音が聞こえてくる。

今日も彼女は、何だか不機嫌。

目を背けたくなるようなブツサイクな顔をして、ブーブーとかいうBGMをならしている。

「ねえ。全然書類進んでないんだけど」

「・・・・・・・・」

「聞ってる？」

「・・・・・・・・」

あ、コレ。完璧に無視だね。

悲しいね、僕。

お前みたいな奴がいるから、戦争は終わらないんだ――――
！！！！！！（壊）

「ちょっと、かなで？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・何スか」

ちよ、ものすっごい無愛想――！！

「書類、全然進んでないよ」

「はつ。そんなに早く進めたいなら私よりもっと有能な人を選べばいいでしょ？」

ねえ、僕って先輩だよ。オマケに、俺様系だよ。

それなのに・・・

それなのに何この扱い！！（壊）

はっ！！

やばい、やばいよ僕。

ステップを踏みながら壊れ始めちゃってるよ（巷では変態と噂のナッポー、ごめん）。

「って言うか君、いつからそんな子になったの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ？どーでもいいだろ、んなこと」

ヤンキーだアアア （壊）

「君の親もそんな子に育てた覚えはないってさ」

「アア！？何で今の話題にウチのジジイとババアが出てくんだよ

！」

ちよ、君。

今、お母さんとお父さんのこと、ジジイとババアで・・・・。

全国のお父様お母様方に謝んなさいッ！！！！（壊）

あ、僕、マジでやばいね。

ステップを踏みながら壊れ始めるどころじゃないね（巷では……以下略）。

僕、今までバリ様キャラでやってきたのにね。

せめて読者の皆様はうまく撒きたかったね。

……ダメだね、僕。

せめてバリ様キャラに戻らないと。

「いいの？君。そんな口きいて」

「わーい、書類ダイスキ！」

……ほ。よかった。

僕はバリ様キャラとしての威厳を取り戻せたみたいだね。

……今「全然取り戻せてない」とか言った奴、咬み殺（強制終了）。

「ピンポンパンポン　一年B組の綾崎雛くん、職員室に来てください。繰り返します……」

ん……誰だろうね。それより、僕が呼び出されるなんて、何年ぶりだろうね。

「……もしかして先輩、何かやったんですk」

「何勘違いしてるの」

「すみません」

「とりあえず僕は職員室に行ってくるからね」

「あ、はい。行ってらっしゃいませ」

僕は口角を上げると、生徒会室から出て行った。

あー、皆さん。久しぶりのかなで視点です。

なんにしても・・・ひどいですよね、あの腹黒サディスト生徒会長。

本ッ当・・・

死ね！！・・・って感じですよ。

今の台詞（？）で「おや？」とか感じちゃった人は、自分の幻覚として流してください。

そういえば、あの生徒会長・・・弱点ノートはいつも机の引き出しに入れてたよな。
・・・・・・。

ピコーン！！（何かに気づいた音）

いいこと思いついた〜
かなでさん天才だもんね〜（巷ではアホと噂の牛、ごめん）
クフフフフフフフ（巷では変態と噂の南国果実、ごめん）・

・何を思いついたって？それについては、下記をお読みください！

- 1 ・会長は呼び出しで留守！
- 2 ・私が弱点ノート（ネガ）を破壊するのに最適
- 3 ・会長は校長にライターのことをチクろうとするが、証拠がなく、あえなく諦め！

こういうことですな。

もう私天才でしょ。

死ぬ気になんなくても天才でしょ（巷ではシーチキンと噂の缶詰、ごめん）。

・・・なんか最近、著作権に気を使う話題が多いな。まあぶっちゃけ、「つつこまぬが仏！」ってことで。

私は椅子から立ち上がり、会長専用の机へにじり寄った。引き出しを開け、弱点ノートを探す。

・・・あ、あった！

私は弱点ノートを引っ張り出し、その場でびりびりと引き裂いた。あ・・・ゴミの処理しなきゃ。

私が片付けていると、生徒会室の扉が開いた。

ま・さ・か！

そこにいたのは、もちろん生徒会長様でした

「・・・それ、僕の弱点ノート」

K O ・ R O ・ S A ・ R E ・ R U

こうなったら・・・

「すすすすすすすすすすすすすんません！いやあちよつと体重300キロくらいあるホワイトタイガーが入ってきちゃって！駆除しようとしたらそのその、弱点ノートが生け贄にされてしまったというか何というか！」

必殺、謝るの術

「・・・ごまかさなくてもわかってるよ」

効かなかった！！必殺技スルーされた！！
イヤーーーー！！！！死ぬううううう！！！！

「・・・大丈夫だよ、こういうこともあるつかとあと5400冊くらいノートを用意してるから」

「何イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
！！！！？？？？」

「だから、君にはまだ働いてほしいし。簡単には殺さないよ」

死ななかつたからいいとはいえ、やっぱり・・・

腹黒サディスト生徒会長、死ね

今日の日記 五月十四日

あーーーーー

もうなんか色々最悪

だからとりあえず・・・

生徒会長とか、マジで死ね

第七話 灰色の青春って、ちょ、ふざけんな

五月十五日、朝！

今日もよく晴れて、いい気分

最近は私を避けていた真優も元に戻って、いい気分

………だが。

「今日テストが国語算数理科社会四教科共々全部ありやがるんだよ！……！！！！！！！！！！」

「……数学でしょ？」

いや、真優。私はつつこみじゃなくて慰めを求めているんだけど。

「はー……やっぱり、この腐りきった世界は純粹で美しい血の海に変えるべきだなあ」

「ちょっ！かなで！今のはマジで巷では変態と噂の南国果実に謝ろうよ！」

何だかんだで、今日は四教科全部のテストがある日です。

……言ってもいい？

………めんどい。

学校に着いた。

な もりじゃないっスよ。大とか小とかはなく確かに並だけど、なみ りじゃないっスよ。

説明はこれくらいにして・・・いや、別に遅刻しても怒られる（笑われる？）だけで、メチャクチャ怖い風紀委員長たちにフルボッコにされるようなことはないよ。

・・・それにしても、学校にもう着いちゃったけど行きたくないなあ。数学のテスト15点取る自信あるんだけど。・・・家庭教師つけられんのはイヤだけだね。

私は嫌々ながらも、自分の教室へ行った。

曾山君は、私に告白してから学校を休んでいる。

・・・何でだろ？

まあいいや。

私は自分の席に着き、カンニングペーパーを用意しようとした（良い子は絶対マネしちゃダメ！）。

そのとき、誰かが話しかけてきた。

「よ。」

「んあ？・・・おはよ」

話しかけてきたのは、私のオサナナジミの串間リュウタだった（あだ名は串カツ）。

「おいかなで、お前まさかカンニングペーパー用意しようとしてんじゃないだろうな？」

「ハハハ、バカだな。お前じゃあるまいしそんなことしねえよ。このクソ串w」

「・・・（クソ串なんて言われたの初めて・・・）今、手元にあった紙、投げ捨てただろ」

「男がコマイこと気にすんなって」

私はクソ串（もうリュウタとかめんどいからクソ串）にそう言つと、カンニングペーパーを諦めて復習を始めた。

三分経過。

「知るかこんなもー！！！！ん（机バーン）！！！！ええい！男はぶつつけ本番だ！」

私は教科書を投げ捨て、睡眠の姿勢をとった。

だってさあ、今学生に必要なのは、普通学力より睡眠だろ！！・・・いや、睡眠が百万円か、って言われたら、私は百万円を取るけどさ。

つつーことで私は、夢の世界へ落ちていった。

気がつくと、そこは花畑。たくさんきれいな蝶々が飛んでいる。私はそこで横になり、まぶたを閉じて睡眠の姿勢をとった（現実でも寝てるのにな）。

それからしばらくして、私は隣に誰かがいることに気づいた。私は目を開き、両隣を見る。

そこには。

「むつきゅん!!!!!!!!!!!!!!バリ様!!!!!!!!!!!!!!」

私は勢いよく立ち上がった。なので、机と椅子が一緒に倒れた。みんなは私を見ている。

当たり前だろう。テストをやっている途中にアニメキャラの名前を叫ぶ奴がいたら、誰だって振り向く。・・・いや、悪い意味で。えーと・・・私が寝ていても誰もつつこまなかったのは、私の席が窓側一番後ろだったからである。ありがとう、食とその他のものをつかさどる神のナグーレ・コローセ様！（殴れ・殺せ）

幸いにもテストは始まったばかりで、テストの点が15点にも満たないということはなかった。

「・・・・・・・・つぶ、君ってやっぱり
バカだね」

放課後の、生徒会室。

「……うるさいですねえ、人の人生を笑わないでください」

私は書類の山と向かい合わせになっていた。これはもう日課とな

っている。

「いいの？僕にそんな口きいて」

「すみません、謝りますからそのノートしまってください」

そしてこんなやり取りも、日課となりつつある。

.....

あれ？

ねえ私、貴重な青春時代の日課が「腹黒生徒会長に脅されること」と「書類の山と向かい合うこと」でいいの？

よくないよね!!

つかやバイよね。この腹黒生徒会長のせいで、私の青春が今まさに.....

「灰色の青春」になりつつあるよ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!

「君の青春なんて最初からお笑いそのものな報われない青春だから、灰色になったって特に変わりはないよ」

「ワオ！！今、さらっと人の人生バカにしたよこの人！！」

えーと、謝らないと咬み殺されそうなので、謝っておきます。
巷ではツンデレと噂の風紀委員長さん、ごめんね

「さて。謝罪も終わったところで、さっさとその書類を片付けてもらおうか」

「・・・はい。頑張ります」

そういえばこの人、何で私の思ってることがわかるんだろう。読心術かな。

「生徒会長だからね」

「ワオ！またかよこの人！心臓に悪いよ！」

私がびっくりして咄嗟に出した言葉。それなのに、この言葉には余計びっくりした。

「じゃあ、やめるよ」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・」

私が驚き固まっていると、綾崎先輩は口元を歪めて笑った。

「そう簡単に死なねちゃ困るからね。まだ仕事も残ってるし」

「そういう意味かよ!!!!!!!!!!私のトキメキを返せチクショーー
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

私の叫び声は、虚しく学校中に響いた。

今日の日記 五月十五日

クフフフフフフ！（巷では変態と噂のナツポー、ごめん）
久しぶりに私の「学生やってます」っていう証拠にスポットライ
トがあたった！

けどやっぱり最後はギャグオチかよ！

やっぱりギャグのヒロインは報われないのかねえ・・・

ふざけんな!!!!!!!!!!!!!!

報われろよチクシヨ——！！！！！！！！

第八話 KANADE LIFE

「走るのが苦手でも 成績がヤバすぎでも
あせらず のんびり のんきが一番さ

誰だつて 簡単に ブン殴れたらいいけど
漫画の ようには いかないのが人生さ

十年後も二十年後も ずっと脅され続けるかな
大切な 青春なのに 腐っていくよ どうしよう
」

「何それ。どこのダメダメ中学生のつもり？」

「私の今の心境をうたっているんだよ」

「いい歌を変に脚色しないでくれる」

「・・・じゃあむつきゅんのキャラソンにでもする？」

「ファンに殺されるよ」

ただいまのもので不快に思った方々、すいません。

それと、巷ではシーチキンと噂の缶詰様、巷では変態と噂の南国果実様、誠にもうしわけございません。

はい、ただいま放課後の生徒会室です。

このサイアクなドグサレ生徒会長とともに、仕事してます。

・・・今哀れんでくれた人、ありがとう。

それにしても・・・・・・ヒマ。

「何言ってるの。書類あるでしょ」

「……人の心読まんといてって昨日言いましたよね、私。」

「さっさと書類終わらせてね」

「（無視かよ）……書類自体ヒマです」

私がそう言ったとき、そのドグサレ生徒会長は何て言ったと思う？

「死ね」

だよ。

一瞬、

「テメエが死ねやゴウル
アアアアアアアアアアア
アアアアアア！！！」

って言いそうになっただけだね。

いいですか？皆さん。私はあのドグサレ生徒会長と違って、心の中ではボロクソ言うけど、

面と向かっては言わない優しい人間なんですよ。

・ ・ ・ 今「言えないだけじゃねーの」とか言った奴、咬み（強制終了）

何だかんだで、私は仕事に戻りましたよ。

「……って、いうか、何で私は敬語になっているんだろう。まあいいや。」

・ ・ ・ そういえば、ドグサレ会長って馬鹿じゃね？

どこがって？だってさ、さっき私は

「走るのが苦手でも 成績がヤバすぎでも」

って言ったのに、あいつ・・・綾崎先輩のクソヤロウは私に、高さで言つと30センチくらいの書類をやらせやがるんだもん。
そいつを馬鹿だと言った私を、いったい誰が責められよう。

私が心の中でブツブツ呟いていると、生徒会室の扉が勢いよく開いた。

私は顔だけをそちらに向けた。綾崎先輩も同じような感じである。

「・・・・・・・・クソカツ？」

そこに立っていたのは、皆さんお忘れかと思うがオサナナジミのクソカツだった。

そしてクソカツは第一声に、

「何だよクソカツって！昨日までクソ串だっただろうが！」

と言った。

私はクソカツを無視し、我らが生徒会長様を見た。

ワオ！見事にいつもより不機嫌な顔になってるよ！

えーと、謝らないと咬み殺されそうなので謝ります。
巷ではツンデレと噂の風紀委員長様、ごめんね

謝罪も終わったところで、もう一度います。

生徒会長様の顔が、いつもより不機嫌になってます!!

えーと・・・クソカツというウルサイ奴が来たからキレてるのかな。・・・

だったら、早く追い出さないと!!!!!!!!!!

「おいクソカツ、用事は何だ!?!」

「お前今日、日直だろ」

「あああああ忘れてたあああああああああ!!!!!!!!!!」

チクシヨウクソカツ!!!!

人の嫌なことを思い出させるという露骨に嫌なイヤガラセをしてきやがる!!!!

覚えてろ（最強かつ最低なキメ台詞）!!!!

「生徒会長様アアアアアアア!!!!!!」

「（うわ、追い詰められた顔でこっち来た）・・・何」

「マツハで終わらせてきますんで……！ちよっとおひまをもらいます……！！！！！！」

「は？・・・あ、ちよつ・・・」

死ぬ気は撃たれてないが、私は死ぬ気で走った。

あ……ちよ、これ、電車とか追い抜いてるんじゃない？

・
・
・
・
・
・
・
あ、曲がり角。

電車とか追い抜いてるだけあって、とまれな……

•

ギャア!!!!!!!!!!!!!!

!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!

今日の日記 五月十六日。

死ぬ気的な状況だったために、骨折にはいたらなかったよ。
そのあと、生徒会長にひっぱたかれたけど。
言ってもいい？

DVじゃね？

いや、DVD？とかいうボケはいらないから。

・・・DVは置いといて、問題はクソカツと生徒会長だよ。
クソカツは、今回が2回めの登場。

変わって、綾崎先輩は今回が初めてでもなく・・・めちゃくちや
出てるよね。

なのに今回はさ、

生徒会長のほうがクソカツより影薄い気がする！！！！！！

・・・ドンマイ、生徒会長。

明日があるさ（見下し中）

「現実から目を逸らそうぜ」

だった。

そして学校。

私は教室に入るなり、机に倒れこんだ。

さっきの話に戻るけど・・・すると何か？私は九日働きづめで、
購買の小さくて高いパンだけをあてに労働を強いられている・・・
ということか？

「バカ野郎そんなん認めねえぞチクショー！！生徒会長デメエ、
堕ちろそして廻れ！！」

あー・・・昨日と同じくまたみんなに注目されてるよ・・・。

しかも椅子と机倒れちゃったし。

あーもう。

・・・言ってもいい？

めんどい。

私は嫌々ながらも椅子と机を元に戻し、再び机に倒れこんだ。
 ……ん？妙に教室が騒がしいな。

私は教室の入り口のほうを見た。

せ
・
・
・
・
・
!

「生徒会長様ああああ！！！？？？」

「君はいつも面白いことを言ってくれるね。パイナップルきどりかい」

私は即座に土下座し、必殺謝るの術を使った。

「すみません！ほんと真性の出来心で！！本当！！本当です！エ
イリアンとプレデターが地球に攻めてこない確率と同じくらい真性
の出来心です！それとマイケ・ジャクソンが、「俺の来世はカメ
レオンだ」と言わない確率と同じくらい真性の出来心でもあります
！」

「・・・エイリアンとプレデターの問題はいいとして、マイケ・ジャクソンは「俺の来世はカメレオンだ」と言うかもしれないじゃないか」

「そつかあああああ！！！！いや、そうかもしれないけどあんだ、マイケ・ジャクソンをどんな人だと思ってんだああああ！！！！」

「いや、逮捕されたし……周りの空気に溶け込みたい人なんじゃない？」

「だからって自分の来世にカメレオン宣言しなくても！！！」

「銃になるカメレオンになりたいんじゃない？」

「ちよつとまった！！！！赤ん坊の殺し屋と一緒にいる時点で空気に溶け込めないよ！」

「極限野郎の家庭教師とかアホ牛とかの中では随分溶け込めてるよ」

「そいつらの中でただだろ！！！」

生徒会長はため息をつき、私の襟首をつかんだ。

クラスメイトには「ご愁傷様」と言っている奴もいれば、合掌してる奴もいた。

「生徒会室逝くよ。君と話していたら埒が明かない」

「こっちの台詞だ！それに、いくの漢字間違ってるって！！！」

私は襟首をつかまれ引きずられ、生徒会室まで連行された。

「何でまだホームルームも終わってないのに来なきゃいけないんですかコノヤロー」

「君用の書類が高さでいうと50cmくらいあるけど。今のうちにやっとかないとそのうち1mくらいになるんじゃない？」

「うわーい書類大好き〜（涙）」

こんのドグサレ生徒会長！！

あんたは人を脅すことに関してはノーベル賞もらえるね！

「それって褒め言葉？」

「キヤーー！人の心読まんというてーーーーー！！！」

「褒め言葉ね。はい、30cm追加」

「えーーーーー！！褒め言葉と認識したなら45cmくらい減らしてよ！」

「あと5cmしか残らないでしょ」

「うるせーい！私は自分の利益になることしか考えねえんだい！」

「へえ。はい、20cm追加」

「結局1mですかーーーーー！！！」

「??????」

ねえ、私。

何が悲しくてこんなことになってるのかなあ・・・。

本来なら居眠りしながら、むつきゅんとバリ様の夢を見ているハズなのに。

私はどんな罪でこんな罰を受けているの！！！！???????

教えてください、ナグーレ・ कोरोセ様。

第十話 第十話記念、頑張れ曾山君2とその他（前書き）

むちゃくちゃつまないです。

話も進まないです。

それでも「見てやんよ」と仰る勇者は、

進んでください！

では、みんなで一緒に？

スクアー・・・・・・・・スクロールどうぞ！！

第十話 第十話記念、頑張れ曾山君2とその他

はい、雛視点です。

・・・誰？今、「何キャラつくってんだよ」って言ったの。
まあどうでもいいけどね。

今回は十話記念として、最近是不登校の曾山って人の土曜日を紹介するよ。

・・・まだ十日だから火曜日だって？
・・・今日を土曜日にしないといつを土曜日にするっていうの？

そんなわけで、曾山って人の土曜日へGO。

「ごめん。私、むっきゅんとバリ様しか好きじゃないんだ」

「ごめん。好きじゃないんだ」

「ゴメン。スキじゃない」

「ゴメン。」

何度も彼女の声がリピートされる。

あのとときの彼女の声が、未だに忘れられない。
それにしても……ショックだよなあ……。

だって、アニメキャラに負けたんだよ。

さすがに、ショックだよな。

僕、もう告白とかできない……。

トラウマだよ。

男の僕だって、あのアニメキャラに対しては「かつこいいなあ」
とか思ったよ。

しかあし!!

アニメキャラに恋路を邪魔されたとなると、話は違ってくる。

この読者の皆さんにも訊くけど、自分の好きな人に告白を断られ、
拳句の果てにその子の好きな人がアニメキャラだったら……どう
思う？

僕は……

・まだなっていないけど、

ノイローゼになるね、うん。

だって！！アニメキャラに負けるって！！

どういう事よコレエ！！！！（壊）

・・・僕、結構自分ではイケてると思うんだけど。
アニメキャラに劣ってるってどういうこと？

・・・腐女子の皆さんをバカにする気はないけど、あんな断り方
されたら、よほど純粋なオトコノコの場合、自殺しちゃうよ。

僕はむっきゅんとバリ様（かなで曰く）のポスターを見、ガッツ
ポーズをした。

僕、諦めないよ。

・・・・・・随分とながかったね。

どうせ脇役なんだから、二文字くらいでいいのに。

ま、ほつといても出番少ないし。こんな風に記念に出してるくらいなんだから、著者も彼には同情してるってことだね。

・・・何？クソカツより影薄く見られた奴の方が、よほど同情されてるって？

骨の2・3本、折られたいみたいだね。

何だか綾崎先輩がキレちゃったみたいなので、かなで視点いきま
す！

・・・ネタも尽きたので、土曜日の柿野家を見てみましょう。

柿野家へGO！

「おっ姉ちゃーーーーーん！朝だよゲブウ！！」

「死ねや」

ちなみに今「ゲブウ」とかほざいてた奴は私の妹です。名前は千奈美。私の妹だけあって、むっきゅんとバリ様が大好きです。それはいいんです。

しかあし!!!

ウザインです。ものすごく。

だって朝私を起こしにくるときに、

「一万年と二千年前からクフフのフ~~~~」

とか歌っていやがるんですよ。

某合体アニメOPから、ナッポーさんのキャラソングになって・・・
なってる・・・

スンマセンでしたああ!!

パソコンもしくはケータイの前にいる方々の目がものすごく怖く
なっていることになった今気づきました!スンマセンでした!!

謝罪も終わったところでもう一度言います。

妹はウザイぜ

いやあ、ながかったですねえ。

・・・・・・・・・・・・・・・・書くこともなくなっただんで、今日はここまで！

・・・・・・・・それと、腐女子もしくはむく・・・・・・・・ナツポーさんのファンの方々、アク・・・・・・・・某合体アニメのファンの方々、本当に申し訳ありませんでした！！！！！！

心からお詫び申し上げます。

創聖・・・・・・・・真性の出来心です。マイケ・・・・・・・・ジャクソンさんが「俺の来世は五 寺だ」って言わない確率と同じくらい真性の出来心です。

お粗末でしたッ！！

第十一話 ハニカミって、見ててはにかむ？

「あの、質問なんですが」

僕が答えようとした瞬間、彼女は叫んだ。

「何でこの清々しい朝八時に、オマケに日曜日に、生徒会室に来なきゃいけないんですかコノヤロー！！！！」

「・・・うるさい。それに、そうでもしないと書類が片付かないでしょ」

「そーですけどね！？唯一の日曜日を潰すくらいなら、土曜日に生徒会室に呼んでほしかったですよ！」

「それは無理。」

「何ですか」

「僕は用事があるから」

「用事ってなんですか」

あ、僕。

トンデモナイ失言をしたよ。

「よ・う・じ・っ・て・な・ん・で・す・か」
「・・・何でもいいでしょ」

僕の用事・・・それは、

毎週土曜日に、アニメ　トに行ってREB　RNのグッズを買い
まくること！

こんなこと、ぜっつっつっつっつっつっつっつっつたいに言えない。

「ふうん・・・まあいいですけどね」

ほ・・・よかった

「ウッソー！！いいわけない！」

死ね。

「クフフ・・・用事ってなんですか、ランチ 先輩（巷では変態と噂のナツポーさん、ごめん）」

「僕はラン アじゃないよ」

とりあえず、コレを知られるわけにはいかない。

・・・え？知られたらどうするかって？

それは、「みらいよりもうー今ーがかーんじーんー」でいくよ。

本当のところ、知られたら来世はトイレットペーパーの芯でいいかなあって。

「あ。もしかして先輩のお母さん、入院してたりします？」

「いないよ」

「ああ、天国の病院にゆーいん」

「外国に出張！！！」

「・・・となると、お父さんが入院？」

「お父さんも出張」

「・・・天国に？」

「死ね」

僕はかなでに背をむけ、書類にペンを走らせた。

かなでは僕の背中に、怒りの声をぶつけてくる。

「ちよお待てやああ！！お前さん、「俺、生徒会長だもん」って
言っ
て許される世界じゃないんだぞおお！！わかつとんのか！？」

うるさいな。

「静かにして。静かにしないと咬み殺しゅよ」

あれ？

.....

「ク……フ……クフ、クハハハハハハハハハハ！！！！！！」

しまったあああああああああ……！！！！！！

何、何なの僕……！

咬み殺しゆって何なのよ僕うううううう！！！！！！

[illegible]

「黙って言ってやるでしょ！きやみ殺しゅよ！！」

[illegible]

しまったああああああああああああああああああ

あああ
！！！！！！！！

何なの、僕！

きやみ殺しゆって何！！余計重症だよ！！

「クフフフ……ク、フ……先輩」

何

「黙っててほしいですか？」

考える。

ダメ……そんな噂流れたら僕死んじゃう……………

僕は黙ってうなずいた。
かなでは満足そうに笑った。

「じゃあ、交換条件って事で」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「だから、私がさっきのことを黙っててあげる代わりに、先輩もライターのことを黙っている、ということです。私はもちろんOKですけど」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

頷きかけて、思った。

この条件に納得したら、かなでは僕と一緒にいる理由が無くなるんじゃないかって。

かなでが僕と一緒にいる理由がなくなったら、かなでは副会長を辞めてしまっだろう。

つまり、それは出会う前に戻ってしまうということ。

お互いを全然知らなかった頃に、もどってしまうということ。

そうになったときのことを考えたら。

胸がどうしても苦しくなつて。

何故だかわからないけど、

それだけはイヤだって、思ったんだ。

そうして、思わず口からポツリと漏れた言葉が、

「いいよ。そのかわり、副会長はつづけてね」

だった。

「しまったあああああああああ！！！！何私、一方的に
「okですけど」とか言っちゃってんのよお！！」

かなでは床に手を着き、頭をぐったりとさせた。

「副会長はこれからも君。そういうことで、いいね？」

私は不本意だけど、力なくうなずいた。

一瞬「この人は、私に副会長をやってほしかったのかなあ」とか、思った。

けどそんなの、

「私のトキメキを返せ!!」

と言う想いで消えてしまった。

これから始まる、私と腹黒生徒会長様の物語。

第十二話 アトガキ・・・的なw

ハイ皆さん、こんにちは！

何で今更、ここに書いているかですが・・・。

腹黒生徒会長様。の、続編希望ができました！！

今書いている小説を終わらせたら書くつもりですが、一応読者の皆様にも聞いてみますw

腹黒生徒会長様。の続編が読みたい方は、コメント欄に「希望します」的なことを書き込んでください。

「別にいらなくね？」という方は、ノーコメントでw

希望者が多い場合は、続編を書きます。

さて、続編を書くことになったら・・・の警告です。

きつと続編には、生徒会長様IよりもREB RN！な内容が出てくると思います。

なので、REB RN！を知らない人は、内容があまりわからないかと・・・。

・・・そういうことなので、お気をつけください。

そして、続編を書くことになったら、この小説の次話となるころに書き込むので、一応チェックをしてみてください。

さて、またまた警告です。

続編決定になったとしても、今書いている小説が終わらないと書けません。

今書いている小説が長くなるか短くなるかで、続編を書く時期も変わると思います。

遅くなるかもしれませんが、そこは待っていてください！

・・・文字も余りまくりなので、他にもちよつとだけ聞いてみま
す。

「腹黒生徒会長様。」のキャラの中で、一番お嫁にしたい人は誰
なのか！？w

・・・あ、性別は問いません。

・・・でも考えてみれば、生徒会長様って、登場人物少ないよなあ・・・。

・・・まあ、気にしません

そして、腹黒生徒会長様。の中で、一番人気キャラは誰なのか！
？w

お嫁・人気・・・どちらとも、コメント欄にて教えてくださいw

でわまたーっ！

第十三話 アトガキ・・・的なw2

ハイ、こんにちわ。

えーと・・・コメント欄にわざわざ書いてくれた方々には申し訳無いのですが・・・

作者が暇なので、続編を書くことにしました！

・・・本当スイマセン。orz

「続編になるかもしれないんだー」と興味本位で小説を覗きに来た方にも謝りたいです・・・サーセン。

ぶっちゃけてしまうと、続編希望者は少なかったのですが・・・。

作者が暇だという理由で、続編を書きたいと思います。

その名の通り暇つぶしなので、つまらなくなるかもわかりません。

「それでもいいよ!」と言う神がいるのなら、どうぞ見てやってください。

さて、文字も余ったので・・・。

「腹黒生徒会長様。的森のくまさん」を書きたいと思います。

つまんねえと思いますが、よろしい方だけどうぞ！

腹黒生徒会長様。 的森のくまさん

配役

女の子

…かなで

くまさん

：雛

お逃げなさいと言った人：クソカツ

空白が入っている部分が、歌詞の部分です。

ある日 森の中 雛さんに出会った

かなで 「生徒会長様アアアア！！？」

雛 「書類、たまってるよ」

花咲く 森の道 雛さんに出会った

雛 「あ、ラフレシア」

かなで 「ど・・・どんだけー！！」

クソカツ 「雛さんの言うことにや かなでさん お逃げなさい」
かなで 「え・・・何でお前に命令されんきゃいけないの？・・・
じゃあな」

スタコラサッサッサのサ スタコラサッサッサのサ

クソカツ 「・・・orz」

ところが 雛さんは 後から ついてくる

雛 「書類・・・」

かなで 「嫌だアアア！！」

ドスドスドスと ドスドスドスと

かなで「ヒイヒイヒイヒイヒイ！！！！！！」

雛 「かなで 待ちなよ。 ちょっと 落し物」

かなで「何も落としてないです！落としたのは運と幸せだけです
！」

雛 「30点って書いてる 白い紙切れだよ」

かなで「ギヤアアア！！テストオオオオオオオ！！！！！！」

かなで「あの雛さん ごめんなさい。 お詫びに 土下座します」
雛 「別にいいけど。」

かなで「じゃあそのノートは何なんですか、雛さん！！」

雛 「ちゃんと台本通りに歌いなよ」

かなで「もう無理です！！ここまでお付き合いくださった皆様、
有難う御座いました！」

雛 「続編をお楽しみに。」

サーセンでした。

こんな駄文集をお見せしてすみませんでした。

ぞ、続編をお楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129d/>

腹黒生徒会長様。

2010年10月14日16時25分発行